

2.1 中学校ハンドボール部熱中症事故【事故①】

基礎情報			
事故発生時期	平成 28 年 8 月	被害生徒及び事故種別・ 被害程度	中学 1 年生男子 1 名 熱中症、死亡
訴訟の有無	無し	報告書作成までの期間	8 か月
事故の概要			
活動種別	部活動		
事故発生の概要	平成 28 年 8 月、中学校運動場において、1 年生男子生徒がハンドボール部の練習中（ランニング後）に意識を失って倒れ、救急搬送される事故が発生した。翌日に当該生徒は搬送先の病院において死亡した。当該生徒は同年 4 月に中学校に入学後ハンドボール部に入部し、少しずつ技術面、体力面で向上してきていた。事故当日の練習では、当該生徒は午前 8 時過ぎに登校し、他のハンドボール部員と一緒に練習に参加した。その後、当該生徒は給水することなく約 35 分間のランニングをした後に倒れた。		
事故の要因			
S (Software)	学校事故を防止するための研修や安全教育、マニュアルや規則、指導計画	<ul style="list-style-type: none"> ● 練習メニューなどを示したマニュアルや指導計画が不十分だった。 ● 熱中症対策の研修は無かった。 ● 部活動運営に関する基本方針の策定が不十分だった。 	
H (Hardware)	授業や部活で使用する施設や器具	<ul style="list-style-type: none"> ● 体を冷却する機器や気象条件を測定する機器は無かった。 	
E (Environment)	事故発生時の温度や湿度、照明などの物理的環境	<ul style="list-style-type: none"> ● 天候はくもり時々晴れ、気温 29.9℃、湿度 71.3% で不快な状況だった。 ● グラウンドやグラウンド周囲に日陰は無かった。 	
L ₁ (Liveware ₁)	当該事故で被害児童生徒を直接指導していた教員やスタッフ	<ul style="list-style-type: none"> ● 2 人の顧問が指導していたが、生徒一人一人の運動能力の配慮や水分摂取状況を把握していなかった。 ● 運動強度の個人への配慮が不十分であり、個々の給水状況の把握や指導が無かった。 ● 部活動指導者と生徒との信頼関係の構築が不十分だった。 	
L ₂ (Liveware ₂)	被害児童生徒及びその家族、被害児童生徒以外の児童生徒	<ul style="list-style-type: none"> ● 被害児童生徒は他の部員よりも体力が低下していた。 	
m (management)	事故に対する学校側の指導体制、指導方法、安全管理	<ul style="list-style-type: none"> ● 生徒が顧問に対し考えていることや、感じていることを自由に発言できる環境が構築されていなかったようであった。 ● 過度な運動強度にブレーキをかけることのできる指導体制の構築が不十分だった。 	

	<ul style="list-style-type: none"> ●部活動指導者と生徒との信頼関係構築が不十分であった。 ●学校体制として、生徒の安全に対する意識を高める取り組みが不十分であった。 ●情報共有体制の構築が不十分だった。
有識者による事故の検証	
調査委員会の 構成員	<ul style="list-style-type: none"> ・大学教授2名(学校保健、熱中症) ・弁護士 ・県中学校体育連盟前会長 ・医科大学助教(小児科) <p>[5名]</p>
提言された対策	
S (Software)	●熱中症に関する通知やマニュアルを含む学校安全に関する通知や計画、「学校事故対応に関する指針」を教員が熟知して有効に活用するため、定期的に研修等を実施し、教員の安全に関する意識を高める必要がある。
H (Hardware)	●指導者は、事故が起こった場合に備えて、体全体をすばやく冷却できる物を準備しておく必要がある。
E (Environment)	●天気予報および WBGT(暑さ指数)を活用し、部活動に無理のない時間設定をする必要がある。
L ₁ (Liveware ₁)	<ul style="list-style-type: none"> ●生徒一人一人の体格・体力に応じた運動強度を設定することが必要であり、そのためには個々の体力に負荷の可能な運動強度をしっかりと把握しておく必要がある。 ●部活動の指導にあたる者は、天気予報だけでなく、練習場所における WBGT(暑さ指数)を定期的に測定し、活動の中止や休憩、身体の冷却給水のタイミングを適切に判断する必要がある。 ●運動強度は生徒の自己管理ではなく、指導者が把握し適切に指導しなければならない。 ●指導者は、生徒の状況に応じ、長期、中期、短期の視点だけでなく、ウォーミングアップの意味、持久力養成方法等について科学的根拠に基づく練習計画を作成し、練習目的、練習効果等を生徒にも十分理解させた上で活動する必要がある。
m (management)	<ul style="list-style-type: none"> ●定期的に校内部活動指導者による会議を開催し、お互いの部活動の活動状況、生徒の様子、保護者との連携方法等の情報交換を積極的に行い、他の部活動に対しても気軽に意見交換ができる環境を整える必要がある。 ●学校は、学校における部活動の意義を明確にし、部活動の運営に関する基本的な方針については全ての部活動の指導者が共有すべきである。 ●学校は、主体的・対話的で深い学びが実践できるグループワーキングやワークショップ形式の授業を行うことにより、児童生徒が安全に対する意識を自ら高め、行動するための取り組みを推進する必要がある。